

第十一章

自修——容易と困難

誰人も二つの教育を有す、一は他より受くもの、一は自ら己に與ふるものに
して一層吓畏なり。

ギガン

田舎に會して沮喪する人あるか、暴風に吹たぐる人あるか、かゝる人は事を
成すや大ならし。勝たんと欲する人あつたか、此に類する人は決して失敗せず。

ジョン・ハンター

賢い、活潑の人は大膽なる試みに依りて困難に克たん。怠惰愚鈍の者は苦難と
危険とを見て怖れ慄へん怖るゝに依りて不可能となるなり。

ローエ

『各人教育の最良なる部分は、自ら己に與ふるものなり』と、是れサー・オータ
ー・スコットの語なり。故サー・ベンチャミン・ブrowデューは、此語を想ひ起す
を樂み、自修に依りて職を勉めしことを誇るを常としき。然れども、此事たる
や獨り彼のみならず、文學、科學、技術等に於て名聲を得しもの、一として然ら
ざるはなし。學校に於て受くる教育は、たゞ、初步のみ、其價值あるは、主として

これが心を訓練して、専心研學、敢て倦まざる習慣を造る點にあり。他より注入せられたるものは、自身の勤勉、堅忍の努力に依りて得たるものよりも、我有となること、少し、勤勞に依りて得たる知識は、一の所有物となる。——全く我自身の所有物となる。自修は印象を明確耐久にし、事實の心に記さること、注入的知識の夢にだもなす能はざるものあり。此種類の自修また勢力を喚び起し、堅固を研く。一問題の解決は、他の問題の了得を助け、斯くして知識は轉じて才能となる。吾人自身の活動的勢力が最も肝要なる事なり。如何なる輕便も、如何なる書籍も、如何なる教師も山の如き課業の暗誦も、活動的努力を不用ならしむることなし。

古來最良なる教師は、自修の重要を認むるに最も早くして、生徒を勵ますに、自己の能力の活動的使用に依りて知識を獲得すべきを以てせし人々なり。彼等は口授よりは訓練に重きを置き、己の從事せる仕事に生徒をして與からしめんとせり。かくして教授を以て知識の斷片の受動的受容よりは遙に高きものとせり。是れ實にアーノルド博士の依りて以て働かし精神な

り、彼は其生徒に、自身に頼り、自身の活動的努力にて其能力を啓發すべきを教へ、彼自身は唯生徒を指導獎勵するを役とせり。彼は曰ひぬ「余はオックスフォード大學に少年を送りて奢侈の生活をなさしめ、便益を利用して自己の爲めを計るなからしむるよりは、寧ろヴァン Дейメン スランド(譯者註南太平洋中のタズメーニア島の古名)に之を送りて、自ら衣食の爲めに働かしめん」と。又或時彼は曰ひぬ「人其天性劣るとも、正直眞實熱心に之を涵養せば、神之を助け給ふ。若し眞に衰むべき一事地上にありとせば、此神の明智こそそれならめ」と。斯の如き性格を有する生徒について、彼言ひしことあり「余は、此生徒に對し帽を脱して敬禮せん」と。レ・ル・ハムに於て比較的遅鈍なる生徒を教へ居りし際、アーノルドは、稍、激して其生徒にもの言ひしに、生徒はアーノルドの顔を見上げて曰ひたり「何故に先生は怒りてももの言ひ給ふか、實に我は出来るだけ努め居るなり」と。多年の後、アーノルドは其子等に居常恒に此話を語り、尚ほ附言して曰く「余は一生中、此時程感ぜしことなし——かの生徒の顔附と言葉とは、余決して忘れしことなし」と。

労働するものは、高き智的修養を得る能はずと云ふこと決してなし。是れ上述する所の諸人が、卑賤より起りて文藝、科學に大名を得しに依りて明かに知るべし。適度の勞作は、人間の體格に健全にして補益あり。勉學が心を教育するが如く、勞作は肉體を教育す。されば閑散に過ぎざらん爲めに各人に勞作あり、又勞作の間に餘暇あるは、社會の最善なる状態なり。上流社會の勞作の要なき人々すらも、多くは抑ゆべからざる本能を満足せしめんため（中には退屈を免れんためのもあり）勞作せざるべからざるものなり。或は英倫の田舎に狐狩りに行くものあり、或は蘇格蘭の丘陵の間に松鷄狩りに行くものあり。又多數は瑞西の山岳に登攀せんとて本國を出づ。各學校に短艇あり、競走あり、クリケットあり、其他の競技あるは、皆此必要より出づ。青年は此處に於て心身の力を健全に涵養す。傳ふるもの曰く、ウエリントン公爵は、イートン中學にて少年時代を過せしものなるが、晩年に及び、或時少年がイートン中學の運動場にて遊戲に耽り居るを見て、語るらく「オクターロイの戰に勝を得し所以のもの此處にあり」と。

ダニエル・マルサスは、大學にある其子に、大に勤勉して知識を修得すべきことを勧めたり。然れども彼は又心の全活動力を保ち、智的快樂を享くる最良法として男性的遊戲をなすべき由を命じたり。マルサスは曰ひぬ、「如何なる知識の種類も、如何なる天然藝術の知得も、御身の心を喜はし、又強むるものなり。余はクリケットが亦御身の腕と脚とに依りて同事をなすを喜ぶ。余は御身が身體の運動に於て優るを喜ぶ。而して余は思ふ、心的快樂の半以上、心的快樂の最良部分は人が立ち居るとき最も多く受くるものなり」と。然れども活動勞作の尙ほ重要な用は、大神學者ジェレミー・テーラー之を語りぬ。彼は曰ふ「怠惰を避けよ、而して汝の時間を忙劇有用なる業務に廢らず用ゐよ。如何となれば、精神に用事なく、身體用ふるなき空虚の所に肉慾は直に侵入するものなり。安樂、壯健、怠惰の人にして、誘惑せられて、貞潔なりしはなし。されども凡ての用務の中、身體の勞働は最も有益にして、惡魔を逐ひ出すに最も効あり」と。

人生に於ける實際的成功が、身體の健康に由ること、世人の想像以上なり。

ホドソン

ホドソン(譯者註、印度にありし英の勇將英國の一友に書き送りて曰く『余は信ず、余若し印度にて成功せしとせば、物的に言はると、それは健全なる健康に由れり』と如何なる職業に於ても、勞作を續くる能力は、必ず身體の健康に依ること大なり。されば智的勞働の一原因として、身體に注意をなすこと必要なり。青年學生の間に屢々不安心不愉快、無活動、空想に陥る傾向あり、爲めに現實生活を輕侮し、人間の平坦路を厭ふに至る。此傾向を英にてはバイロニズム(バイロン主義、獨にてはヴェルテリズム(ヴェルテル主義と呼ぶ。此傾向の起るもの、思ふに身體運動の閑却に因るならん。博士チャンニング(譯者註、十九世紀、米國の神學者、著述家また同一傾向の米國に生ずるを見評して曰く『我國の青年にして、絶望の學校に生成するもの多きに過ぐ』と。此青年病の唯一の療法は、身體の運動にあり——活動にあり、勞作にあり、身體的業務にあり。

博士チャンニング

早年の勤勞

早年の時、自己の好む器械的業務に勤勞するは有益の事なり。是れサー・アイザック・ニュートンの少年時代にて例證するを得べし。ニュートンは、比較

的遲鈍なる學生なりしも、其鋸鉋手斧を用ふるに甚だ勤勉熱心なりき。即ち『其借間にて敲きつゝ、鉋打ちつゝ、』水車、馬車、其他萬般の器械の標本を造り、稍、長ずるに及びては、朋友の爲めにテーブルや戸棚を作りて喜べり。スミートン、ワット、ステイブソン(譯者註第二章に出づ、皆器械發明家)も亦少年にして既に道具の使用に巧みなりき。彼等青年の時、かゝる自修をせざりしならば、恐らくは長じて彼の如き大を成す能はざりしならん。前來叙述する所の大發明家、大器械家の早年の自修も亦かくの如し。彼等の工夫顯智は、早年の時絶えず手を使用せし爲め實際的に訓練せられたるなり。手工の人、出世して智的勞働者となるとも、其手工時代の訓練が後の業務に大便利を與ふるを見るべし。エリヒュン(譯者註十九世紀、米國の宗教家兼語學者)曰ひぬ、余は研學して得る所あらん爲めには、辛き勞働の必要なるを悟りぬ。されば余學事の勉強を棄て、革前掛をかけ、心身の健康の爲め鍛冶の場に赴きしこと一再に止まらずと。

道具使用の練習

青年が道具の使用を練習するは、普通の事に於て得る所あると同時に、手

腕の使用を學び、健全なる勞作に親み、實際の事に關する能力を養ひ、器械師と交を結び、有用なる才能を得、又不退轉なる身體的努力の習慣を養ふ。蓋し勞働階級の人が、早年時代に器械等に關する勞働をなすは必要上より出て、之が爲めに手先の熟練を得、體力の使用を學ぶことは、確かに貴族階級勞働階級に對して廣義に云ふに勝る利便なり。勞働階級の職業に附隨する重なる不利益は、其身體的勞働をなすことにあらずして、其勞働の激烈長時にして、僱主が勞働者の道德的能力、智的能力を看過するにあり。貴族階級の青年は、勞働を賤視するやう教へられ、實際上の知識を得ずして成長す。之に反して貧民階級は、其勞働的業務の中に閉ぢ込められて、其大多數は全く無學にして成長す。然りと雖も、身體的訓練には身體的勞働に智的修養を加へなば、此兩害惡を避くるを得んか、而して今やこの健全なる教育法を次第に用ひんとする傾向の世にあるを覺ゆ。

心的職業に従事する人すら、其成功は身體の健全に因ること尠少にあらず。されば一文士は下の如き極端にまで斷言せり、「我國偉人の大は精神的

のこととなると同様に、身體的のことなり」と。タイムス紙上の論文。健全なる呼吸器は智力の修養に缺くべからざると等しく、法律家、政治家として成功せんにも缺くべからず。肺の表面廣くして之に充分血管の來り居りて、血を純潔にする作用の盛なるは、充分なる活力を支ふるに必要なり。而して此活力の上に頭腦の活動の據ること尠少にぬらざるなり。法律家は熱鬧煩雜なる法廷の高處にて、其業に従はざるべからず。又政治家の領袖は人衆囂々たる議院に於て、且く困難なる討論に當り、其疲勞と興奮とに堪へざるべからず。故に法律家にして其業榮々政治家にして多忙なるものは、智力の忍耐活動よりも、尙多く身體の忍耐活動を要す。此の如き力を現はせしものにブルームあり、リンドハーストあり、カムペルあり、又ビールあり、グラハムあり、バルマーストンあり、皆胸廓廣く肺の力盛なる人なり。

ナー・オーター・スコット・エディンバラ大學の生徒たりし時、希臘の馬鹿者と云ふ綽號を得たりしが、其跋なりしにも拘はらず、著しく強健なる少年なりき。彼はイオード河に於て、最も巧なる漁夫と共に鮭を槍にて捕へ得、ヤロ

パロウ、
クラーク

ーにある獵夫と共に暴馬に乗り得たり。スコット後文學事業に身を委ねても、決して野外の遊戲に對する嗜好を棄てず、午前「ウエーヴァーリー雜誌」の爲めに文を草し、午後は野外に兎を逐へり、教授ウキルソンは甚だ力業に達し、雄辯及び詩歌の高調なるが如くに鎚を揮ふことにも優れたりき。又バーンス(譯者註、十九世紀蘇格蘭の詩人)は青年の時、重もに其高飛、ブッチング、相撲に於て有名なりき。我英國大神學者の中、青年の時其體力に於て名ありしものあり、アイザック・パロウ(譯者註、十七世紀英の神學者兼數學家)チャーターハウス學院にありし時、拳闘を以て名高く、屢、鼻を破りたり。アンドリュ・フラ(譯者註、十八世紀英の神學者)ソハムにて農家の若者となりて働き居ける時、主として其拳闘術の熟練を以て稱せられたり。又アダム・クラーク(譯者註、十九世紀英の牧師、聖書學者)は、少年の時たゞ其大石を轉ずる臂力を以て名高かりき、——彼長じて後大思想を轉送する力をあらはせしが、此力の秘訣も、亦思ふに大石を轉ぜし力の秘訣と等しかりしならんか。

夫れ吾人が先づ第一に身體の健康てふ堅實なる基礎を造るの必要ある

勤勞は萬
事を征服
す

チャタ
ーの語

こと前述に依りて既に明かなるべし。然れども、之と同時に心的専心の習慣を養成すること、學生の教育に缺くべからざるを認むべきなり。『勤勞は萬事を征服す』と云ふ格言は、知識を征服する場合に於ては殊に眞なりとす。知識に至る道は之を蒐集するに要する勤勞と勉學とを惜まぬ人には、誰彼の別なく、自由なり(邪魔なし)而して凡そ困難てふ困難にして決然たる志望を有する學生に打ち破り難き程大なるはなし。チャタートン譯者註、十八世紀英の詩人其特有の色を有する言をなして曰く『神は人間を造るに充分長き腕を附し、此腕を延ばせば若し艱難煩勞を厭はずば何物にも達し得るやうになし給へり』と。研學に於ても、實務に於けると等しく、精力は大事なり。事業は大に之を旺進せしむべし。吾人は、鐵の熱せる時、のみ鎚、打つべきにあらず、又、實に之を鎚、打ちて熱するに至らしむべきなり。強情堅忍の人、機會を善用するに注意し、僅少の餘暇を利用せば(怠惰者は餘暇を無益に費す其成熟する所の大なること唯々驚くの外なし。さればファীগソン(譯者註、前に出づ)はハイランドの丘陵に羊皮を纏へる時天より直接に天文學を學びたり。

ファ
ーグ
ソン、
リ
ュー
ド

されば又ストーン(譯者註、十九世紀米の著述家は、日雇の園丁たりし時、數學を學びたり。されば又ドリユ(譯者註、前に出づ)は靴を修繕する合間々々に、最高哲學を學び、又ミラー(譯者註、前に出づ)は石坑に日雇者たる時、地質學を自修せり。

前述せし如く、サー・ジョシユア・レイノルズ(譯者註、前に出づ)は勤勉の効力を信ずること極めて熱心なる人なり。されば其所信に曰く、『何人と雖も勤勉、熱心、忍耐に勞作すれば、卓越するを得』と。尙ほ曰く『天才に達する道には難事横はる』と。又曰く『藝術家の熟達には限りなし、たゞ彼自身の辛勞に限りあるのみ』と。彼は、所謂「神來」なるものに信を置くを好まず、たゞ「勉學、勤勞」に信を置くのみ。彼は曰ひぬ、『上達は、唯勤勞の報酬としてののみ人に附與せらる』と。尙ほ曰ふ、『諸君若し大才を有せば、勤勉せよ、以て其才を研くを得ん。諸君若したゞ小才を有するのみならば、勤勉せよ、以て其才の缺乏を補ふを得ん。方向正しき勤勉は、何事をも成就し得、されど勤勞なくば、何事をか成就し得んや』と。サー・フオーエル・バックストン(譯者註、前に出づ)も亦勉強の効力を信

ずる人其謙遜なる所信に曰く、『余若し他人の勤勞時間の二倍を我に用ひなば、何人とも同様のことをなし得』と。彼は普通の手段と非常の専心とを以てせば萬事成すべしと云ふことを堅く信ぜり。

博士ロス曰ひぬ、『余は將來天才と認めらるべき人六七人と交はれり。彼等は皆勞歩者なりき、辛勞勤勉にして志向強き人なりき。天才の天才たることは、其作業にて知らる。作業なき天才は盲目的信仰のみ、沈黙の託宣のみ。されど、功勞は時間と勤勞との結果にして、只志し、只欲するのみにては成就せず。大業は皆大なる準備的訓練の結果なり。熟練は勤勞に依りて生ず。初より困難ならざるものも、皆外見は容易にはあらず見ゆ。歩行すら然り。辯者を見ずや、其眼は熱烈、火と燃え、其唇は洪水の如くに高想を發し、以て思はざるに人を驚かし、其思想の明智と眞實とを以て人を高む。彼や忍耐、反復に依りて秘訣を學び、苦き失望に失望を重ねて奥堂に達せしなり。』

通徹と正確とは、研學に於て目指すべき二主要點なり。フランシス・ホーナー(譯者註、十八世紀、英の政治家、其心的修養の規則を定むるとき、一事に全く

通徹せんが爲め、其事を續けて心を用ふる習慣に、大に重きを置き、彼は此目的を以て、其讀む書を一時に二三に限り、濫讀の惡習に近よらざらんが爲め、力抗最も努めたり。人に於ける知識の値は、其分量に存せずして主として此知識を善事に應用することに存せり。されは正確完全なる人物の有する小知識は、多大の淺薄なる知識よりも、實用上に其價値多し。

『一度に一事を能く、なすものは、何人よりも多くを成す』と、是れイグナシアス・ロヨラ(譯者註、十六世紀、西班牙の宗教家、イエズイ特派の創始者)が格言の一なり。餘り大なる表面に努力を廣ぐれば、吾人は力を弱め、進歩を妨げ、不規則無効の勞作を習慣とするに至るを免れず。セントレオナルド卿曾てサ！
フォーエル・バックストンに、己が研學の方法を語り、以て其成功の秘訣を示したり。卿曰く『余、法律書を讀まんと志せし時、知りし萬事を總て全く我有となし、第一の事に熟達せざる中に、決して第二に移らずと決定せり。我競争者の多數は、余が一週に讀む程を一日に讀了せり。然れども、十二ヶ月の終りに於て、彼等の知識が記憶より逃れ去りしに、反し、我が知識は依然新鮮明瞭に

して、之を得し日と異なるなかりき』と

吾人は徒らに知識の分量を得んとすべきにあらず、又賢者を造るものは多讀にあらず、研學の目的に研究の適應すること、一時其主題に心を集中すること及び心的専心の全規則を支配する、訓練の習慣等に因れり。アバーネシー(譯者註、十八世紀、英の外科醫)の言に曰く『余の心に一定の限度あり、余若し心の收め得るより餘分に入れなば、心はたゞ他の餘分の物を排出する結果に終る』と、醫學の研究に就いて語るらく『人若し其望めるものについて明確なる思想を有せし、之を成就すべき適當の方法を選び得ること確かなり』と。

確固たる目的を抱きてなす研學は最も利益あり。一科の知識を全く習得せば、此知識は何時にても、用ひて吾人に利益をなすこと、之に熟通せざるものに勝る。されば、たゞ書物を所持し、知識を要するとき、之を求むべき處を知るのみにては充分ならず。實際的知識は、生活の目的に應ぜん爲め、之を我と共に携へ、之を用ひんとて呼はゞ直ちに應じて出て來るやうなさるべし。

らず、家に資本を有するも、懷中に一文を有せざるは事足らず。吾人は如何なる場合にも交易の用をなす所の知識の貨幣の一束を懷中せざるべからず。然らずんば、之を用ふる機會起りしとき、我力弱きを感ずべし。

決斷と敏捷とは、事務に於て肝要なるが如く、自修に於ても亦肝要なり。青年をして自己の工夫に據らしめよ、青年をして幼時より出來るだけの行為の自由を得しめよ、さらば決斷敏捷の性能を養ふを得ん。差圖の過ぎたるも、拘束の過ぎたるも共に、自助の習慣を造るに妨けとなる。過度の差圖や拘束は、游泳を知らざる人の腋下に縛りし勝腕の如し。自信の缺乏は修養に妨けとなること、多分人の想像に超えん。言あり、曰く人生の失敗其半は人其馬の跳り出でんとするを強いて引き戻すことより起ると博士ジョンソンは其成功を以て、自力に信用を置きしことに歸するを常とせり。眞の謙遜は、自己の價の適當なる認知と全く兩立す。決して自己の價の全否認を求めず。中には自ら價なくして大に價あるが如く自惚れる人もあれども自信缺乏し、從つて行動の敏速を缺く人あり。是れ人格の缺點にして、大に個人の進歩向上

を妨ぐるものなり。而して事功の極めて小なるは、其努力の極めて小なるに由ること世の常なり。

忍耐力の徳

自修の成果を得んとする希求は、何處にか之を有せざるものあらん。されども之に對して避くべからざる代價を拂ふことは、人大に之を嫌へり。避くべからざる代價とは他にあらず、辛苦勞作是れなり。博士ジョンソン曰く「研學に不耐なること、これ現代の心的疾病なり」と。此言や今も猶ほ眞なり。世人は學業を達する大道あるを信ぜずして「人氣よき」道を堅く信ぜんとす。教育に於て、世人は勞力を惜む法を求め、科學の習得に捷徑を探し、僅に「十二課にて」又は「先生なくして」佛語、拉丁語を學ばんとす。彼等は流行社會の貴婦人の如し。語學の教師を傭ふに條件を附して曰く、働詞や分辭の煩雜なるを以て苦しむる勿れと。世人は斯る婦人と同様の方法にて科學の皮相を得、彼等は暫時の間講義實驗を加へたるを聽きて化學を學べりとなす。笑氣(一酸化窒素)を吸入し、綠色水の赤色に變ずるを見、燐の酸素中に燃ゆるを見て、以て化學の皮想を學了したるなり。かくの如き皮相の知識は、如何に大きく見積

もるも知らざるには稍勝るならんも、何の用にも立たざるなり。かくの如くにして、人は屢々只喜ばされ居るに過ぎざるを、教育せられ居ると謬信す。

かくの如くにして、青年が勉強なく、勞苦なくして、知識を得しめらるゝもの之を教育と稱すべからず。蓋し是れ心を用ふるのみにて心を富ますことなし。そは又其一時は刺戟を與へ、一種の智的穎敏を給せん、然れども、確志なく、快樂以上の目的なくしては、毫も堅實なる利益を與ふることなし。此場合には、知識は唯一時の印象を與ふるのみ、一感觸を與ふるのみ、これ知識を樂む、感覺的に、智的ならず、主義のみ。かくして、強き努力と獨立の行動とにて起されたる人々の最良性能は、熟睡の極に達して再び醒めず、たゞ突然の災禍、又は苦難來りて、其來るや寧ろ幸をもたらし來るなり、勇進の精神を喚び醒ますことあらんのみ。此事なくしては、かの熟醉は到底醒めざるなり。

娛樂の假裝の下に知識を得るに馴れて、青年は勤勉と勞苦とを要する知識は直に之を拒斥す。慰みに知識學問を得し彼等は、忽ち之を慰みものとなすならん。而して、かくして得たる心力浪費の習慣は、時經れば、彼等の心力人

格に去勢的影響を及ぼすや必せり。ブライトンのロバートソン曰ひぬ、『濫讀は喫煙の如く心を弱め、心が眠れるに對しての辯解となる。こは怠惰中の最も甚だしきもの、人の精力を殺ぐこと最も大なり』と。

害惡は成長するものにして、幾多の方面に其惡力を及ぼす。其最も少き害は、淺薄にして、其最大なる害は堅固の勤勞を避くるに至ることなり。心の調子を低劣薄弱にすることなり。吾人眞に賢良ならんと欲せば、熱心勤勉し、祖先の爲せし如き不斷の専心に堪へざるべからず。何となれば、勤勉は昔も今も、常に價值ある物に對して拂ふべき代價なり。吾人は一目的を抱きて、勞作するを以て足れりとすべし、而して堪へ忍びて其結果を俟つべし。最良種の進捗は遅々たるものなり。然れども忠實熱心に勞作するものには、報酬の來ること疑ひなし。勤勉の精神を日々の生活に體現せば、次第に自身以外の品位、有用共に勝りたる事々に自己の力を用ふるに至るべし。而して吾人は尙ほ勤勞を續けざるべからず。何となれば、自修に限りあることなし。詩人グレイ(譯者註、十八世紀英の詩人は曰ひぬ、『業務に従ふことは、幸福なることなり』

と、僧正カムバールフンドは曰ひぬ、『鏽腐るよりは磨りへらす方宜し』と。アーノ
ールドは叫びぬ、『吾人は休息すべき永世を有するにあらずや』と。安息は別の
處にてなす。譯者註、來世にて安息し、現世にて働くの意と。是れウキリアム・ゼ
サイレントの友にして、強精にして常に働きしマルニクス・デセントアルデ
ゴンドの標語なり。

吾人の尊重して宜しきものは、たゞ自己に授けられたる能力の利用のみ。
自己の才能を正當に用ふるものは、十人前の才能を有する者と同様に尊重
せらるべし。優れたる智力の所有が、其人に價值を附せざること、讓られたる
財産の所有の然ると異なるなし。如何にして是等の智力が用ひらるゝか、
如何にして此財産が用ひらるゝかは、是れ價值の定まる所なり。心は有用の
目的なくして、多大の知識を集むることを得ざれど、知識は善良と、頑智とを
伴ひ、正しき人格の中に、體現せられざるべからず。然らずんば、知識畢竟何す
るものぞ。ペスタロッヂ(譯者註、十九世紀、瑞西の人、有名なる教育改革者なり)
の所信に曰く、智的修養はそれのみにては有害なり。即ち凡て知識の根は正

道を踏める意志の畑に根づけ育てざるべからずと。知識の修得は、人生の賤
き兇暴大罪を犯すことなからしむとは事實ならん。然りと雖も、之を健全な
る主義、習慣にて強固にせずんば、我儘なる惡徳を防ぐことはなし。故に知識
勝るも、品性全く不具、學校の學術を心に充たすも、實際的知慧を有せず、從ッ
て人の模範とならずして、寧ろ鑑戒となるもの世に甚だ多し。吾人は日々の
生活に於て能くかゝる人に遭遇す。『知識は力なり』とは今日流行の格言なり。
然れども、狂言も、壓制も、野心も、皆亦力なり。知識其自身は、賢人之を導かざる
ときは、惡人を尙一層危險になすのみ。而して知識を以て最良の善と見做す
社會の如きは、惡鬼の會堂に比して何の勝る所かあらん。

今日と雖も、世人は學術研究の價值を過重し易し。世人は思へらく、多くの
圖書館、會院、博物館を有するが故に、我等は大に進歩開發しつゝ、ありと、然れ
ども、かくの如き便宜は、最高の自修には幫助とならずして、寧ろ妨礙となる。
富の頗有が仁惠を造らざると等しく、圖書館の所有及び之が使用は知識を
造らず、吾人は、現代文明の世に、多大の利便を有することは事實なり。然れど

書籍は學
識を供せ
るに用ゐ
られし智
識が經驗
を啓發す
る力を失
はせしめ
ることを
能はざる

も、穎智と悟得とは、觀察、注意、堅忍、勤勉の舊道を旅行して、人の所有物となること、古も今も異なるなし。單に知識を有することは、穎智や悟得とは大に異なり。穎智や悟得や、これ讀書よりは高き修養に依りて得らるゝものなり。讀書なるものは、他人の思想を所動的に受け入るゝものにて、心の努力極めて小なるか、或は全くなし。故に我等の讀書の額は智力上の飲酒に耽るものと謂ふべきか。一時は喜ばしき興奮を生ぜんも、心を改善し、豊富にし、品格を建造せんには、一の効力なし。されば多くは讀書と稱する單に時間を潰すことに従事し居りて、心を修養し得るとの誤想に耽れるなり。而して讀書のことたる、惡事をなすを防ぐ位が、關の山たるなり。

尙ほ吾人は次のことを心に留めざるべからず、即ち書籍より集めし經驗は、學問の性質を有するに過ぎざるに反し、實際生活より得し經驗は、智能の性質を有す。而して少量の智能も大量の知識よりは遙に利益あり。ポーリング・ブローグ卿の言や眞なりと謂ふべし。『間接直接に吾人を善き人となし、良き市民となすことなき研學は、怠惰の文飾あり、惻巧ある一種たるのみ、而

してかゝる研學に依りて得たる知識は、無智の賞むべき一種たるのみ、これ以上の何物にもあらず』と。

良き讀書は有用にして教訓となると雖も、これ只心神を修養する一方法たるのみ、品性の建造に於ては、其効實際的經驗よりも善模範よりも劣れり。一般讀書の風起らざる長き前、既に英國には、賢明、勇敢、眞實の人士出てたり。マクナ・カルタ(譯者註英國大憲章と譯す、千二百十五年英國の志士、王ジョンに迫りて獲たる英の憲法なり)を得たるものは、器局識量ある人々なり。彼等は主張を紙上にあらはせし記號(文字)を解讀する能はざりしも、其事共を了解し認知し、又爲めに争ひたり。かくの如くにして英國自由の基礎譯者註、大憲章を指すは、無學なりしも、品性甚だ高貴なる人に依りて据ゑられたり。されば吾人は次のことを許さるべからず、修養の趣旨は、單に他人の思想を心に充たすことにあらず、又單に所動的に印象を受くることにあらず、實に吾人の智能を開き、己が招かれし所の職分に於て有用強力の勞作者たらんこと是れなり。我が強精有用なる勞作者の多數は、多讀家にあらざりき。プリ

マ
カ
ル
タ
を
得
る
人

ブレンダ
テイ
ソ
ン
ハ
ン
ス
の
著
書
等
の
知
識
は
大
き
な
保
存
し
な
る
な
り

ンドレイ(譯者註、十八世紀、英の運河工師)ステイブンソン(譯者註、前に出づ)共に成年に達するまで、読み書きを學ばざりき、然れども二人は大業を成し、勇猛の生活をなせり。ジョン・ハンター(譯者註、前に出づ)同職の大工に劣らず、椅子やテーブルを造り得しも、二十歳の時、読み書きの力誠に乏しかりき。ハンター生徒の前に講義し居る時、前にあるものゝ一部を指して曰く、『余この事に關しては未だ嘗て調べず、されども諸君其業に卓越せんと思はば、此事を學ばざるべからず』と。

さらば人の有する知識の額が重要なにあらずして、知識を有する目的如何が重要ななり、智能を養ひ、品性を改善し、吾人が善良、幸福、有用の度を増し、人生の高き目的の追求に於て、慈惠、強精、有力の度を増さんとする事、以て知識を得る目的となすべきなり。『人一人たゞ道德的品性を離れて才能を賞讃し、獎勵する習慣に陥らば、宗教上及び政治上の意見は道德的品性の具體的形式なり、百般の墮落に赴きつゝあるなり。』(土曜評論)吾人は自らならざるべからず、なざるべからず、他人のなり又なせしものを讀みて沈思す

エ
ア
ン
・
リ
バ
ウ
ン
・
リ
ヒ
テ
ル

るだけにて満足すべきにあらず、吾人は我が最上の思想を行爲にすべし、少くとも吾人は、リヒテル(譯者註、十九世紀、獨の文士)と等しき言を發し得ざるべからず。『余は余の有する實質より出来るだけのことを爲せり、何人も余れと同様の資質よりは、是れ以上を造り出す能はず』と。蓋し天より授かりし責任、能力に従ひ、神助に依りて、己を訓練し、支配し、行くこと、是れ人間の責務なり。

自重

自己訓練と自己支配とは、實際的、智能の初にして、其根柢を自重に置くべきなり。希望は之より生ず、——希望は力の伴侶、成功の母なり、強く希望するものは、中に奇蹟の才能を有するが如し、極めて謙讓の人にて、かく言ふならん、『自己を尊重し、自己を發達させること——これ人生に於ける余の眞職分なり。余は社會と云ふ一大組織の責任ある一部として、余が精神、身體及び天性を傷はざる責務を社會及び社會の創造者なる上帝に負ふ、他面に於ては、余は我が組織の各部を出来るだけ完全にせんと努むる責務あり。余は單に我が天性中の害惡を除くべきのみならず、其善質を呼び起すべきなり。余

は自己を尊重するが如く、他人をも尊重する責務あり。これ他人亦余を尊重する責務あるが如し」と。故に相互間の尊重、公義、秩序等は起るなり、而して法律は是等を文字にあらはし又保護するなり。

自重は人の纏ふべき最貴の衣なり。心を鼓舞すべき最高の情感なり。ピタゴラス(譯者註、古希臘の哲學者)が『金言詩句』中には最良の格言多し。彼は其一を以て、學生に「自己を尊重すること」を命じたり。人は自重と云ふ高想を抱きて生れしもの焉。ぞ肉感を擅にして其體を汚し、汚想到耽りて其心を汚すべけんや。此情操を、日々の生活上に齎らすときは、清高、眞摯、操守、德行、信仰等、凡ての美德の根源となる。ミルトン曰ひぬ「敬虔公正にして、自己を尊重することとは、尊貴有價なる企畫の起る源なり」と。自己を侮るは、自己の評價にも他人の評價にも、價を低く見るものなり。思想既に我を卑しとせば、行爲も亦卑くならん。人は下瞰しては、向上する能はず。上らんと欲せば、見上げざるべからず。極卑の人と雖も、自重の情感を適當に有せば、我身の支へらるゝを感ぜん。貧窮と雖も亦自重の念に依りて上げられ軽くせらるべし。貧人が、誘惑の間

に、毅然として立ち、卑しき行に依りて自己を汚さざらん、と努むること、げに、高貴なりと謂ふべし。

立身出世
の手段と
識しての知

自修の低落する一因は、之を以て『出世』の道とのみ思ひ過ぐるにあり。かゝる見地よりせば、教育が時間と勞力との最良の投資なること言を俟たず。如何なる職に於ても、頭智は人をして其境遇に適せしめ、勞作の方式の改善を促し、萬事に於て適應、熟練、有効の度を増す。手を以て勞作する者又頭を以て勞作する者は、其事務に當るに、識見を明かにし我が力の増すことを自覺せん——力の増すを感ずるは、是れ人間自覺中の最も壯快なるものならん。又自助の力次第に發達し、各人自重心の度に應じて、卑き誘惑に對する抵抗力増すべし。社會と其活動とは、全く新しき趣味あるものとなり、彼の同情は擴大し、かくして己の爲めのみならず、他人のためにも働く心を起さん。

前述諸例の如く、自修の結果必ずしも高名卓絶を得るものにあらず。人類の大多數は、古往今來如何に文明の社會にても、普通の職業に勤勞せざるべからず。社會如何に改善進歩の大をなすとも、人は日々の勞作より免るゝこ

と能はざるなり。然れども、吾人の爲し得べき一事あり。何ぞや。曰く、貴きにも賤きにも、色彩を與ふる所の高貴なる思想を、日々の勞働に結合して、之を高むること。是れなり。人如何に貧賤なりとも、古今の大思想家は、來りて彼と共に坐し、暫じ彼の伴侶たるべし。大思想の來るや、寒居茅屋を厭はざるなり。かくの如くにして、善讀書の習慣は大なる快樂と自己改善との源となり、品行爲全體の上に、善良なる影響を及ぼすこと甚だ大なり。而して自修は富財を齎らすことなくとも、人をして高尚なる思想感情の伴侶たらしむ。一貴族、或時某聖者に嘲るが如く問へり『御身は御身の全哲學を以て、何の得る所ありしか』と。『少くとも余は自己の心中に交友を得たり』と。是れ聖者の答なりき。然れども、世に自修のことに失望し、勢拔くる者多し。是れ彼等が自修に依りて『出世』すと思ひ居りしも、思ふが如く涉々しくも『出世』せざるが爲めなり。彼等は樞の實を植ゑて直に一大樞樹の出づるを條つものなり。思ふに、彼等は知識を見るに、恰も市場の商品を以てす、故に思ひし通りに賣れずとて煩問す。トレメンハヤー氏其著『教育批判録』に於て一事を記せり。ノルフォーク

の一學校長、其學校の急速に衰ふるを見て、其原因を探究せり。然るに父兄が子弟を退學せしめし理由は、彼等が『教育は境遇を高めるもの』と豫期せしに反し、實際上何等の利益をも得しめざりしに由ることを確めたり。かゝる理由を以て、彼等は子弟を退學せしめ、最早教育のために我を煩はさじとせしなり。

自修に關する低き者は他の階級に於ても亦熾なり。而して常に多少世に流布し居る謬れる人生觀のために鼓吹せらるゝなり。然れども自修を以て或は現世に他人を超ゆる方法と見、或は智的娛樂の類と見るも、品性を高め、靈性を擴ぐる力と見ざるは、之を低き標準に置くものなり。ペーコンの言を以てせば、知識は單に利益販賣のための店舗にあらず、上帝の榮光のため、又人の産業の扶助のための、豊富なる倉庫なり。『自己を高め、自己の社會的地位を上進せしめんと骨折るは、尊敬すべきことなること事實なり。然れども、之をなすが爲めに、我身を犠牲にするは不可なり。心を以て、體の役となす、是れ心を賤役に用ふるなり。成功なるものは、知識よりは寧ろ勤勉の習慣、細事の

注意に依るものなるが、成功を得る能はざりしとて、自己の薄命を歎き訴ふるは、狭小下劣の心をあらはすものなり。かゝる輩を叱正するには、ロバート・サウゼー（譯者註、十九世紀英の詩人にして著述家の語最も宜し。サウゼー己の忠言を求めし一人に書き送りぬ）御身我言を用ひて益をなすならば、余は忠言を與へんと欲す。されど世に自ら病弱を願ふもの、快癒せし例なし。善人や賢者や、時には現世について怒り、時には現世について悲まん。然れども疑ふ勿れ、現世に於ける職分をめ勤めし人の現世に不満を抱きしことはなし。若し教育あり、健康あり、眼あり、手あり、時間ある人にして、志望を有せずとならば、是れ大能なる神が得る價なき人に、是等の天恩を附與せしものと謂ふべし」と。

教養を以て、智的娛樂の手段として用ふること、これ亦教養を汚辱することなり。現時此趣味を得んとして教養を用ふるもの甚だ多し。通俗文學なるもの、輕浮淺薄にして、徒らに劣情を刺戟するに過ぎざるに、此輕浮と刺戟とを得んと世人の願ふこと狂氣の如し。公衆の俗趣味に迎合せんため、現時の

ドウグラ
ス・ジョ
ールド滑
稽文學を
論ず

書物や定期刊行物は、大に風味をつけ、娛樂滑稽を加へ、鄙言を排斥せず、人間の法則、神の律法を破ることを記せり。ドウグラ・ス・ジョールド（譯者註、十九世紀英の著作者曾て此傾向について語るらく）余は信ず、社會は此萬事に對する永久の哄笑に倦むならん（少くとも余は之を望む）ことを、畢竟、人生は眞面目なり。人類の滑稽的歴史たるに止まることなし。思ふに中には『滑稽なる山上の垂訓』（譯者註、山上の垂訓は、新約聖書馬太傳にあり。基督が傳道の初め、山上になせし有名の教訓なり）を書くものもあらん、英國の滑稽なる歴史を思へ、アルフレッドの滑稽さよ、サー・トーマス・モア一の戯れよ、又モア一の娘が死人の頭を求め、之を己が胸の凹處に附けし馬鹿らしさよ、確かに世は此冒瀆に厭き果てん」と。ジョン・スタールリングも同様の精神にて曰へり『定期刊行物や小説は、現代の人心、特に心未だ確立せざる青少年者流に對しては甚だしく害毒を及ぼす。恰も良水を腐らし、住家を犯す害蟲の如し』と。

辛勞の間眞面目なる業務の間の休息として、天才者の著はせし良き物語を読むは、高き智的快樂にして、老いたるも若きも、人々皆其天性に依りて之

快樂を過
度に好む
危險

に引きつけらるゝなり。吾人また決して適度に之を楽しむことを阻碍せんとするものにあらず、されどかゝる物語の閱讀のみを精神の糧食となし、圖書館の棚を充たす雜物を食ひ盡し、——小説てふ人生の愚にもつかぬ描寫の研究に餘暇の大部を費すは是れ確かに有害なり、常に小説を讀むものは、空想的感情に耽けること甚だしく爲めに健全中正なる感情の萎縮する危険大なり。快活なる某、ヨーク州の大僧正に言ひしことあり、曰く『余は決して悲劇を聴きに行かず、そは我心を消耗し盡くす』と。小説にて起されし憐愍の情は、憐愍的行爲に導かず、小説の刺激せし怱怱は不利鉏をも犠牲をも含まず、故に屢々小説を以て感激する心は、遂には實際の事に無感覺となるならん。人格中の剛鐵は次第に消磨し去り、人格は知らず識らず其活氣と反撥力とを失はん。僧正バットラー曰ひぬ『人心中に、美德の美を描くは譯者註、美德の美しきを空想的に樂むも、行ふ心なきを云ふ、其人に美德の習慣を造ることにならず、否却つて反對に心を凝結せしめ、次第に無感覺ならしむ』と。

適度の娛樂は健全なり、宜しく推奨すべし。然れども、過度の娛樂は、性質全部を害ふ、宜しく注意警戒すべし。人の能く知る諺あり、曰く『働くのみにて、少しも遊ばざるは、ジャックを變じて遲鈍の少年とす』と。然れども、遊ぶのみにて、少しも働かざるは、彼を尙ほ惡しき者となす。其精神を逸樂の中に侵すこと程、青年に有害なるものなし。心の良性能は傷けられ、普通の娛樂は味なくなり、高尚なる趣味快樂の欲求は害はれ、人生の勞作職分に當りて、之を忌避嫌惡するに至る。遊蕩者は、生活の力を浪費し消耗し、眞の幸福の泉源を涸らし盡くす。早く既に逸樂の風に染みて、品性智力共に健全なる進歩をなさず、無邪氣、率直を缺く、小兒節操を缺く、婦人眞實を缺く、少年皆憐むべしと雖も、遊樂に耽りて、あたら青春有望の身を夢と暮らす人は最も憐むべきなり。ミラボウ(譯者註、十八世紀佛蘭西革命中の雄辯家志士)自身について語りて曰く『余の早年時代は、既に後年に受けつがすべき諸能を失ひ、余の活力の大部を消散したり』と。今日他人になせし惡は、明日我に戻り來る。青年時代の罪惡も、亦成年の後、我を責むる具となる。ベーコン卿の言に曰く『青年に於ける天

性の力は過度に走り易し、其惡影響は、老年に至るまで已まず」と、是れ人生の行爲に於て其價值尋常をらざる身體的及び精神的事實を言明せしなり。伊太利人ギウスチ一友に書を送りて曰く「余は御身に確言す、生存の爲めに高き代價を拂へりと。我等の生活が、我等の隨意にならざることは事實なり、自然は、最初は無報酬にて與へんと揚言し、次に忠言を送り來る」と。青年時代の無分別の及ぼす最害惡は、健康を破ることよりも、寧ろ成年になりて其影響を受くることなり。遊蕩の青年は、汚穢の成年となり、自ら清めんと欲するも能はざるに至る、こと屢々なり。之を醫するの方法ありとせば、熾んなる職分、精神を心に植ゑ、有用なる勞作に、勤勉熱心になること、是れなり。

智的能力の最大天才の一人として、佛にベンジャミン・コンスタントあり。然れども、彼や醉生夢死の生涯を送りしのみ。彼若し普通の勤勉、自制をなさば、大事を成し得しものと、之を爲さざるため一の見るべき成功なし。彼は多くの事を爲さんと定めたり。されども決して之を爲さざりき。爲めに世人は彼を呼びて「コンスタント・ゼイン・コンスタント」譯者註、恒心なきコンスタン

トの意と謂へり。彼は文士として其文流暢にして光彩陸離たり、且、後世に遺るが如き著作を書かんと志望を有せり。然れども、コンスタントが最高の思想を裝ふに反し、其生活は卑賤を極め、著書は『超越主義』を説けど、其平生の卑陋なること常に易らず。彼は宗教の著作の準備をなし居るとき、賭博場に出入し、其「アドルフ」を書き居る最中に、卑き陰謀に與かれり。其智力の大なりしにも拘はらず、彼は無力なりき。そは道德そのものに少しの信用をも置かざりし故なり。彼は曰ひぬ「馬鹿なことよ、名節、品位とは何ぞや。余年益々長ずるに及び、益々明かに名節、品位など云ふものゝ無價值なることを知る」と。かくの如きは淺ましき男の吠え聲と謂ふべきか。彼はまた自身を以て「灰と塵なり」とせり。彼は曰ひぬ「余は窮困と倦怠とを伴ひて影の如く地上を過る」と。彼はヴァルテールヤ（譯者註、十八世紀、佛の革進的文士）の如き精力を得たしと願ひたり。若し彼之を有せば、其天才を有するよりも宜しかりしならん。然れども彼は毫も確固不拔の志望を有せず、——只諸種の願望を有せしのみ。彼の生涯は早く老衰して、たゞ破れし關節の増殖となれり。彼は其身を空中に

ありて一脚を有する人に比せり。彼は自己が一の主義なく、一の恒心なきを承認せり。故に其才華煥發なるを以てして、一事を企畫するなく、多年窮困低劣の生涯を送りて、心身消耗して、死せり。

『北人勝戦の歴史』の著者オーガスチン・シーリーの生涯は、コンスタントの正反對にして賞揚すべきものあり。堅忍、勤勉、自修、不撓の研學、是れ彼の生涯の著しくあらはす所なり。彼は目的の追求のため、視力を失ひ、健康を失ひたり。されど『眞理を愛すること』は決して失はざりき。肉體甚だ衰弱して、恰も嬰兒の如く、看護者の腕にすがりて、室より室に運ばるゝにも拘はらず、其勇敢なる精神は、決して彼を離れざりき。盲目虚弱なりしと雖も、彼は次の如き高貴なる言語を以て、其文人生涯を終りたり。曰く『若し余の思ふが如くに、學問の利益が大なる國家的利益の數に於て計算せらるゝならば、余は戰場に傷つきし軍人が國になせしと同様のことをなせしわけなり。余が勤勞の結果は如何にもあれ、余の爲せし勤勞其者は、思ふに消滅せざるべし。余は勤勞辛苦して、現代の通弊なる種々の道德的敗類と戦はんと努めたり。世には怯懦

の輩あり、世に信仰すべきものなきを歎き、己が職分を知らずして、無益に崇拜賞讃の目的物を求む。されば、余はかゝる輩を人生の正道に戻さんと努めたり。如何なれば人は苦々しげに『現社會には凡ての肺のために毫も空氣なし。凡ての人のために毫も職業なし』と言ふや。世に安靜眞摯なる研學あらざるか。こは萬人の達し得べき隠れ家たり、希望たり、原野たらざるか。これ、あらは、惡しき日も過ぎ去りて、辛さを感じず、何人も自己の運命を造るを得。——何人も自己の生涯を高潔に用ふるを得。これ、余の爲せし所。又再び生ると假定せば繰返さんと欲する所なり。余は余をして今日あらしめしものを選ばんと欲す。盲目にして、殆ど間斷なく病みて快癒の見込もなかりしも、余は一の證明を世に供し得。是れ余に於て疑はしく見えざるべし。即ち世には、通例の快樂よりも、財寶よりも健康其ものよりも勝れるものあり。——是れ智識の獲得なり』と。

コレリッヂ(譯者註、十九世紀、英の詩人)は、コンスタントに似たる所甚だ多し。コレリッヂも亦才華煥發の詩人なりしが、コンスタント同様堅固の目的

を有せざりき。其智力の才は多大なりしも、勤勉の能力を缺き、絶えず勤勞するを嫌ひたり。コレリッヂは又獨立心を缺けり。其妻子を高貴なるサウゼーに託して、其精神的勞働に寄食せしむるを毫も耻と思はず。己はハイゲート・グローヴに退きて弟子に『超越主義』を講じ、倫敦の塵埃中に行はるゝ正直なる勞働を下瞰して輕蔑せり。報酬よき職を得らるゝ身にでありながら、彼は身を屈して友人の慈悲にすがりぬ。其哲學の高尙なるにも拘はらず、彼は口備人すら厭ふ程の低卑に下りたり。サウゼーのコレリッヂと異なること如何に大なるぞ。自己の選びし仕事のみならず、屢々乾燥無味なる業務に執掌し、而して又不休の精神と熾んなる熱心とを以て、純粹に知識を愛する念より知識の蒐集に従事せり。毎日、毎時間、爲すべきの業あり。出版者への約束は正しく守らざるべからず、其家族の大なるを口々養はざるべからず。サウゼー若し其ペンを持つことに怠らば、一も食を得る能はざりしなり。彼は言ふを常としぬ。『我道は國王の公道の如く廣く、我生活の資は總てインク壺にあり』と。

ト・ニコル
リッヂを
論ず

ロバート・ニコルは『コレリッヂ追想録』を讀みて後、一友に書き送りぬ。『僅少の精力、僅少の決意を缺きし爲めに、如何に大なる智力を此人の失ひしことよ』と。ニコルは眞實勇敢の精神を有す。若くして死せしも、人生の大困難に遭逢して、之を撃破せり。初め書籍商として小商賣に従事せるも、僅か二十磅の負債を苦痛と感ずること甚だしく、人に語りて曰く『負債は首の廻りに懸白をつけたる如くに我を壓す。之を拂ひ得し後は、余決して人より金を借らず』と。此時彼は母に書を送りて曰ひぬ。『なつかしき母君よ、我が爲めに心配し給ふ勿れ。余は日々に精神の確實と希望とを増す如くに感じつゝあれば、思考し反省すること多ければ、余は今思考すれども讀書せず。富を増すか否かは知らざれど遂に富に勝る智は増しつゝあるを思ふ。苦難、貧窮等、人生を荒らす野獸は甚だ多し。人皆之がために惱む。然れども幸に余は大膽にして、畏縮することなく、自重を失ふことなく、人間高貴の所信を失ふことなく、又神の信頼を失ふことなく、以て是等幾百の野獸に相向ふことを得、一點あり、之に達するには、心身の勞苦一通りにあらず。然れども、一たび此點に達するるとき、』

チャー
ルズ・
ス・ジ
エ
ス・
フック
ス
堅忍を
論ず

は、人、之、より、下、瞰、し、得、る、こ、と、恰、も、高、き、山、頂、に、あ、る、旅、人、の、如、し、下、に、は、風、雨、露、々、と、し、て、騒、げ、ど、も、自、己、は、平、然、と、し、て、日、光、の、中、に、立、つ、な、り、余、此、點、に、既、に、達、し、たり、と、は、言、は、ず、さ、れ、ど、日、々、之、に、近、よ、り、つ、い、あ、る、を、覺、ゆ、と。

人、を、造、る、も、の、は、安、樂、に、あ、ら、ず、し、て、努、力、——便、宜、に、あ、ら、ず、し、て、困、難、な、り、人、生、の、如、何、な、る、位、置、に、あ、る、も、確、實、な、る、成、功、を、得、る、前、に、は、必、ず、困、難、に、遇、う、て、之、に、打、ち、勝、た、ざ、る、べ、か、ら、ず、是、等、の、困、難、は、誠、に、我、等、の、良、教、師、な、り、恰、も、我、等、の、過、失、が、往、々、に、し、て、我、が、最、良、の、經、驗、と、な、る、が、如、し、チャー、ル、ス・ジ、エ、ーム、ス・フ、オ、ック、ス(譯、者、註、十、八、世、紀、英、の、政、治、家、雄、辯、家)常、に、曰、く『余、は、一、度、失、敗、し、て、而、も、其、失、敗、を、意、と、せ、ず、し、て、進、む、人、に、望、を、屬、す。華、々、し、き、成、功、の、生、涯、を、踏、む、人、よ、り、も、多、く、望、を、屬、す』と、彼、は、曰、ひ、ぬ『青、年、が、其、華、々、し、き、處、女、演、説、に、成、功、し、て、名、を、著、は、せ、し、や、大、に、宜、し、然、れ、ど、も、最、初、は、成、功、せ、ざ、り、し、も、屈、せ、ず、し、て、邁、進、す、る、青、年、を、余、に、示、せ、余、は、此、青、年、の、方、最、初、に、美、し、く、成、功、せ、し、者、の、多、く、よ、り、前、途、の、大、を、成、さ、ん、を、信、ず』と。

一般に失敗より得る所、成功より得る所より大なるものなり。吾人は屢々

智能と力
量に依りて
得らるる

ハンター

ワット

デーヴィ

『何が不可なるか』を知りて『何が可なるか』を見出す。思ふに一度も過誤を爲さざるものは一も発見する所なからん。吸上唧筒を造らんとする計畫に於て、水管が水上三十二呎以上揚げらるゝは失敗なり。而も此失敗や、觀察眼ある人をば氣壓理法の研究に導き、ガリレオ、トリーセリ、ボイル(譯者註皆機器發明家)等の天才者に探究の原野を拓きたり。ジョン・ハンターの所信に曰く『外科醫師たるもの、其成功と共に失敗の經驗をも公表せずんば、外科醫術のことに毫も進歩するところなけん』と。工師ワット(譯者註、前に出づ)は、器械製造の事に於て最も必要なるは『失敗の歴史』なりと言へり。彼曰く『吾人は失敗の書を要す』と。サー・ハムフリー・デーヴィー(譯者註、前に出づ)一日極めて熟練なる實驗を示されしに、謂うて曰く『神に謝す、余の熟練なる手工にあらざること。何となれば、余の發明の重要なもの、皆余の失敗に依りて起りたればなり』と。又同じく有名なる物理學者は、次のことを書き残しぬ。其研究の途中にて、一見打ち破り難く見ゆる艱難に會せしとき、これ實に發見の近づき居る時なりきと、世に最も偉大なること——例へば大思想、大發見、大發明等——

は、困難の中に養はれたるもの、屢々悲哀の中に考へられ、遂に困苦して確定せられしなり。

ロシニ

ベートーヴェン(譯者註、前に出づ)ロシニについて語るらく『彼は良伶人たるべき資質を有せり、若し少年の時鞭撻訓練せられしならば成功せしなり。されども、彼は其得し便宜のために失敗せり』と、我れ力ありと信ずるものは、反對説に會して怖るゝ要なし、寧ろ過賞を避け、虚名を嫌ふべきなり。メンデルスゾーン(譯者註、十九世紀獨の作曲家)が、其『エリヤ』の第一興行の時、バニングハムの音楽堂に入らんとするや、其友人にして批評家なる一人に謂うて曰く『君の爪を余に突き入れ、何を好むと余に語る勿れ、何を好まずと余に語れ』と

困難逆
の功能

將軍を鍛練するものは、戦勝よりも、戦敗なりと云はる言や眞なりと謂ふべし、ワシントンは戦に勝ちしよりも負けしこと多し、然れども彼や最後に成功せり。羅馬人は、大勝戦の多くに於ても、戦の初は收れたり。モロウ(譯者註、十八九世紀英の將軍)は、友人之を太鼓に比せり、打たれたる時のみ敗れたる

時のみ人之を知ると。ウェリントンには、最も著しき困難に際會せしが、こは却て彼の決心を強め、人として將軍としての其大性能を明かに發揮し、爲めに其軍事的天才を完成したり、熟練なる水夫も亦暴風雨の中に、最良の経験を、得、暴風雨は彼を鍛へて自己依頼の人となし、勇武の人となし、最高訓練の人となす。英國の海員は、世界無比と稱せらる、彼等の最上の訓練は、之を怒濤澎湃たる海と朔風凜冽なる夜とに負ふならん。

弱乏は或る殘酷なる學校教師の如くならん、されど又最良なる學校教師なり。艱難の苛責は、吾人の畏怖する所なれど、其來るや勇猛大膽に之と抗爭せざるべからず。パインズの言ひしや眞なり、曰く、

損失や苦難や、

正に奇烈なる教訓なり。

さりながら、此處に、智あり、

此處に、預智を得べし、

他にては之を得る能はず。

『艱難の効力やげにいみじ』艱難は、吾人の力を吾人に示し、且吾人の精力

を喚起す。若し其人の人格に眞價あれば、壓迫せられたる時、最美の香氣を發すること。恰も香氣ある草の如し。古語に曰く『艱苦は天に導く梯子なり』と。リヒテル(譯者註、前に出づ)間を發して曰ひぬ『人貧苦の下にありと雖も、何ぞ眩く^{くら}とを須ひん、貧苦や是れ處女の耳に穴を明くる痛みの如し。此傷に寶玉を懸くるを得るなり』と。吾人人生の實驗に於て、強き患難の健全なる試練は、同時に自己を保つ力を人に與ふること常なり。苦痛の下に、勇ましく我を持ち、快然として、障礙にあたる人世に多し。而も是等の^人後成功繁榮するや、奢侈安逸等の誘惑、貧苦の時の誘惑より尙ほ危險なりに抵抗すること能はざる^{こと}。比々として然り。風のために羽織を取り去らるゝが如きは、是れ弱者のことのみ。普通一般の力の人、溫暖なる日光の爲めに攻撃せられて、之を失ふこと世の常なり。されば、患難の下に、身を持するより、幸運の下に、身を持する方、更に高き訓練と、更に強き人格とを要すること、屢々なり。

物惜みせざる性質は繁盛と共に暖まり、燃え立つ。されど富裕よりかゝる影響を受けざる人も數多し。富は卑陋なる心を益々惡しくす。陋劣卑屈なる

人を陋劣傲慢となす。然れども繁盛が心を傲慢無情となすに反し、艱難は決意の人の心に剛毅を與ふ。パーク(譯者註、前に出づ)の言を以てせば『艱難は神の命令に依りて我等の上に置かれたる峻嚴なる教師なり。神は親の如き保護者、教誡者にして我々か我等を知るよりも尙ほ善く知り、我等が我等を愛するよりも尙ほ善く愛す。』困難に會する必要なくば、人生は大に易からん。然れども人の價値は減ぜん。艱難にあたりて之に處すること、宜しきに適は、品性を鍛練し、自助を教ふ。かくして困難は我等に對して最も健全なる訓練となる。吾人がそを認むると否とに係はらず。かの俠勇なるホドソン(譯者註、前に出づ)が罪なくして印度の指揮官を罷めらるゝや、不當の讒誣と批難とに心の壓せらるゝを感じたり。然れども、ホドソンは尙ほ一友に次の如く言ふの勇氣を保ちたり。『余は戰場に於て敵に對するが如く、大膽に艱難に對せんと努む。而して萬事皆相當の理由あることを認め、安んじて我が才能の最善を盡し、猛然として職務に當らんとす。物憂き職分と雖も、之を能くなさば、其報いあらん。若し報いなくとも、職分は職分なり』と。

人生の戦は多くは困難なるものなり、苦闘せずして之に勝つは名譽を得ずして、之に勝つことなり、困難なくんば、成功なし、苦闘せずしては、何事をも成就し難し、困難は懦弱者を怯懦となさん、然れども、決志あり、勇氣ある人には健全なる刺戟とならん、人間進歩の道に横はる障礙は多くは、善行確實、正直、熱心、活動、堅忍等に依りて征服せらる、特に困難を破り、不幸と大膽に戦はんとの決心が、障礙を除くことは、最も大なり、此事や是れ尙に人生几百の経験の吾人に證明する所なり。

『困難の學校』は、國家にとりても、個人にとりても、道徳的訓練の最良の學校なり、けに『困難の歴史』は、今日まで人類の成就したる大事、善事、凡ての記録たり、北方國民は不屈の氣概と不毛の土地とに付せり、是れ其境遇に已むを得ずと雖も、暖國の人士の夢にも知らぬ困難を絶えず嘗めたり、然れども、之が爲めに彼等の受けける利益に至りては、死と計り知るへからざるものあらん、吾等の最良の産物は、もと外國より來りしものなれども、之を發育せしむる爲めに費したる氣練と勤勉とは、遂に世上最良の人民を發生するに至

りたり。

困難ある時には、人は善惡に拘はらず、現はれ來るものなり、困難と相會するは、人の力を鍛へ、人の熟練を増し、人を強くして、後來の努力に遺憾なからしむ、恰も競走する馬の如し、小山を駆け登ることに馴れしめば、後容易く走り得るに至る、成功に至る道は嶮峻にして、山に上らせんとする人の精力を試む、障礙は之と争へば征服せらる、善願は大膽に之を搜めば、網糸の如く柔かなり、目的を實現するに最も力ある計、此に我は之を成就し得、又成就せんとの道徳的確信なり、凡そ是等のこと人は、常に依りて之に知るものなり、かくて困難が吾人の之を破らんと決心せざる中に自ら退き去ること、屢々あり。

たゞ正に試みよ、さらば大を成し得ん、何人も試みるまでは、何を成し得るかを知らず、而して強いらるゝまでは、出來るだけの力を盡くさるもの多し、絶望せる青年は歎息して曰はん、『若し余かくかくの事をなし得んには』と、然れども、只欲するのみにては、何事か成就せん、希求は進みて、志望となり、

努力とならざるべからず。而して一の力、強き試みは、千の希求に勝る。出來得べきことを妨げ、事の成就否、事の企圖すらをも妨ぐるものは『若し』の語なり。是れ無力と絶望との眩なり。リンドハースト卿譯者註、前に出づ。曰ひぬ『困難は征服せらるべき事なり』と。直ちに困難と戦へ、容易は實行と共に來る。精神力と鞏固とは、努力を反復して得らる。かくの如くして、心神人格共に鍛へられて、殆ど完全なる修養を得、同一實驗を経ざるものには、思ひ及ばざる徳行と精神と自由とを以て行動するを得べし。

困難の征服は、吾人の學問研究なり。而して一の困難の征服は、他の困難の征服の助をなす。教育に於て、初は價值なしと見ゆるもの、例へば死語の研究、數學と稱する線や表面の關係は、まことに實驗上に大價值あり。而して其價は吾人に給する知識の點に於てよりも、寧ろ其吾人に供する發達の點に存ず。是等學術の研究は、努力を喚起し、専心の力を修めしむ。而して努力や専心や、此研學なかりせば、潜在して出てざりしならん。かくして一事は他事に導き、以て一生の間、事業勞作相續き相進む。困難との遭逢は、生命終り修養終る

とき始めて終を告ぐるなり。然れども、失望銷沈をのみ續けなば、人決して困難に打ち勝つことなし。一生徒デ・アレンベルトに數學の第一原理を學ぶ能はざるを訴へしに、アレンベルト答へて曰く『進めよ、信と力とは御身に來らん』と、至言と謂ふべし。

趾頭にて旋回する舞妓、ソナタを奏するヴァイオリニストは熟練を得るに、多くの失敗と忍耐反復とを要したり。カリンミ(譯者註、十七世紀、伊の作曲家、其調の快捷優美なるを賞められし時、叫んで曰く『嗚呼、君は余が如何なる困難を以て此快捷を得しかを知らず』と。一日サー・ジョシュア・レイノルズに問ふものあり、一畫を名指して、之を描くに幾許日を要せしかと尋ぬ。レイノルズ答へて曰く『余が全生涯を』と。亞米利加の辯護士ヘンリー・クレイ、青年に忠言を與ふるときは、下の如く述べて其雄辯修養に於ける成功の秘訣を語れり。『余の成功は只一事に因れり、即ち余二十七歳の時、日々歴史或は科學書を読み、其内容について語ることを始め、爾來多年之を續けたり。此即席の演説は、時には畑にて、時には森にて、又屢々遠き穀倉に於て爲されたり、而

して聴衆には馬牛等を有せしなり此早年に辯舌の練習をなしたることは余を激勵すること大にして、余が後の運命を形成する原由となりたり」と。

愛爾蘭の辯舌家カーランは其發音に非常の缺陷を有し、學舎にありては、『^{ども}吃るジャンク・カーラン』と呼ばれたり。彼法律の研究に従ひ居り、自己が發音の缺點を矯正せんと苦み居りし際、偶々『討論俱樂部』の一會員、カーランを指して『沈黙せる辯士』と嘲りたり。カーランは之に憤激して遂に雄辯の人となるを得しなり。カーランの嘲けられたるは、グーハー（譯者註、十九世紀英の詩人）と等しく、曾て演說せんとして立ちしも一語をも發する能はざりければなり。此奇罵は彼を憤激せしめぬ、憤激の餘り、彼は雄辯滔滔々として之に應へたり。此偶然の事件は、彼に雄辯の才能あることを示したり。彼は之に勵まされ、新しき精力を鼓して雄辯術の研究をなしぬ。彼は數年の間、毎日文學書の良き個所を高く力強く、明かに讀みて發音を正さんと力め、姿見鏡の前に立ちて態度を學び、其醜き風采に適當せる見振りを選びたり。彼は亦自ら訴訟事件を出し、恰も判官の前にあるが如き注意配慮を以て辯論したり。

カーラン遂に辯護士となる。時に一志^{オウリッヂ}をも有せず、然れども、エルドン卿の説に従へば、初めに『一志をも持たざることは將來卓越の第一要件なり、辯護士として事務に勤勉し居るとき、尚ほかの討論俱樂部にてなせし如き羞慚に襲はるゝことあり。一口判官ロビンソンの言に憤恚を發して、激語を以て應へしことあり。訴訟討論の場合に、カーランは判官に對して曰ひぬ、『閣下の言ふが如き法律は、余の書齋中の如何なる書物に於ても未だ見ず』と。判官は冷笑の口調にて應へぬ。『そは然るべし、君よ、されど余は思ふ、君の書齋は甚だ小なるべし』と。判官ロビンソンは激烈なる政治上の黨類として名高く、世に稀なる亂暴獨斷の意見を述べたる小冊子の著者なり。カーランは自己の寒生涯を嘲けられし如き言葉に憤激して、かく答へぬ、『閣下よ、誠に然り、余は貧なり而して余の貧生涯は確かに余の書齋に乏しきをなしたり、余書を有すること多からず、然れども、彼等は選擇せられ居り、また善く之を讀みたりと信ぜり、余は多數の惡書に據らずして、少數の良書に依りて職業の素養をなしたり。余は余の貧窮を耻とせず、余若し富を得んが爲めに、敢て身を屈し

て、卑陋と腐敗とに及ばず、余は寧ろ富其者を耻ぢん。余華族とならずとも譯者註判官ロビンソンは貴爵の士なり。余は常に正直ならん。余若し不正直とならばたとひ高位に上るとも是れ惡に依りて得たる高位のみ。余を益々高名にはなさんとも、益々廣く、益々名高く、人に賤しめられんのみ」と

赤貧の極も、自修研學者には障礙とならず。語學者アレキサンダー・マレー教授は、古き木板に、ヒース（譯者註、灌木の一種）の燃えさしにて文字を記し之を學べり。父は貧賤なる牧人にして、その有する書物としては、價一片の『小教義問答錄』のみ。されど普通の用には上等に過ぐる程に思はれ、日曜日の問答の爲め大切に戸棚に保存せられたり。教授ムアーは、青年の時貧にしてニュートンの『プリンシピア』を購ふこと能はず。友人より借り、其全部を手寫したり。多くの貧書生は、生活のため日々勉め居り、其間に知識の斷片を諸處にて得、其狀恰も冬期野山の雪に包まれし時、鳥が諸處に僅かの食物を得るが如し。彼等は其苦闘を續けたり、而して遂に信と望とは來れり。有名なる著述家兼出版者、エディンバラのウキリアム・チャム・バースは、此市の青年の一集會

にて、青年の獎勵にとて次の如く簡單に己の貧き首途を語れり。『余は諸君の前に、獨學自修の人として立つ。余の教育は、蘇格蘭の小寺領學校に受けしもののみ。後貧少年としてエティンバラに來るや、晝は働きて、夜は之を大能者の賜はりし智性の教養に用ひたり。朝は七時乃至八時より、夕は九時乃至十時まで、余は書籍商の小僧として業務に當れり。而して余の勉學は、此後に睡眠時間を割きて僅に爲し得たるのみ。余は小説を讀まざりき。余の注意は自然科學、其他有用の事に向ひたり。余はまた自ら佛語を學びぬ。余は此時代を回顧して大興味を感ず。たと悲むべきは、再び之を繰り返す能はざることなり。何となれば、余は懷中僅に六片を有して、エディンバラの屋根裏部屋に學び居りし方、今日華美便安を極めたる居間に坐するよりも、快味多し』と。

ウキリアム・コベント（譯者註、十八九世紀、英の著述家）自己が英文法を學びし方法を語れり。是れ困難の下に勞作せる學生に、興味と教訓とを與ふることに大ならん。彼は曰ひぬ『余は一日六片を給せらるゝ兵卒たりし時、文法を學びたり。我寢室の隅、又臥床の隅は、余の學ぶ所なり。我背囊は余の本箱なり。我

膝の上なる一片の板は余の習字板なり。余貧にして蠟燭又は油を買ふこと能はず、冬夜は薪火の外に光とてはあらざりき。余や實にかゝる境涯にありて、兩親なく、又我に忠言と獎勵とを與ふる友人もなし、而も遂に此事業を成せり。然らば世の青年たるもの、たとひ貧窮なりとも、たとひ日々の業務多忙なりとも、たとひ居室其他の便宜惡し、とも、一の事業をも成し得ずして、何等の辯解ありとするか。ペンや紙を買ふため、余は減食するの已むなきに至りしことあり、而も此時や、半は飢餓に迫り居りしなり。余は自分の時間といふべきものを一も有せず、十人に下らざる思慮なき輩が、一の束縛もなく全く自由に語り、笑ひ、唱ひ、囁き、諍ひつゝ、ある間にありて、余は讀み且つ書かざるべからざりき。インク、ペン、紙等を買ふため、時々支出すべかりしファージング(譯者註、極小の銅貨、我一錢位に當る)を輕しと思ふ勿れ。此ファージングこそ、悲しいかな余にとりては大金なりき。時に余は今日ほど背丈あり、又健康と努力の盛んなること人に超えたり。市場にて費さるる金の全額は一週各人に二片(シス)のみ、余は次のことを記憶す、又記憶すること可ならん。一日金曜

日、凡て必要の費を支辨して後半片(ペン)を貯へたり。是れ翌朝赤鯉を購はんためなり。夜半我衣服を引きたるに、かの半片(ペン)は姿を隠して影だに見えず。此時や余は生存に堪へざる程飢餓に迫り居たるなり。余は汚き煎餅蒲團中に頭を埋めて、小兒の如く泣き叫びたり。余やかくの如き境涯の下にあり、此困難に遭逢して之を打破したり。されば余は再言せんとす世界に其無爲懶惰に對して辯解を有する青年ありや」と。

佛蘭西の
石工、
授とな
る教の

研學に於ける堅忍、専心の著しき實例として、政治上の關係より佛の本國を逐はれて倫敦に住みし人の履歷を語らん、彼の最初の職業は石工なりき。暫く此職にありしが業務衰へて暇を失ひ、赤貧の襲ふ所となりぬ。同じ亡命者に、佛蘭西語を教授して豊かに暮らせるものあり。かの石工は身體維れ谷まりて、此人の許を訪ひて、身の振方を相談したり。此人答へて曰く『教授となれ』と。石工は答へぬ『教授とや、余や石工たり、常に方言を語り居たるもの。御身は戯れ居るに相違なし』と。佛語の先生は再び言ひぬ『否、然らず、余は全く眞面目なり。余は再び忠告す——教授たれ。余の許に來れ、余御身に他人を教ふる

方法を授けん』と。石工は答ふ、否、それは不可能なり、余は學問するには、齡既に晩し、余は學者たる素質なし、余は教授たる能はず』と。

かくて、石工は去りぬ。彼は再び石工の口を求めんと試みぬ。彼は倫敦より田舎に赴き、無益に數百哩を旅行せり、主人を見出す能はざりしなり。倫敦に歸るや否や、先の教師を訪づれ、曰く、『余は到る處に石工の口を求めたり、然れども失敗せり。今は教授たらんことを力むべし』と。教師は直ちに石工を己が家に置きて教へたり。石工は専心人に優れ、理解力鋭く、且智力強盛なりし故、直ちに文法の骨子を覚え、文章構成の規則に通じ、佛國古文學の正しき發音（これは尙大に學ぶの要ありき）を知りぬ。かの教師が、既に彼を以て充分人に佛語を教ふるに足ると思ひし時、偶々廣告によりて教師の空位あるを知り、申込みて採用せられたり。見よ、眇たる石工は正に教育者となりたるにあらずや。

彼の勤めたる學院は倫敦の郊外にあり、曩に彼が石工として働きたる所なり。彼が毎朝其『着更へ部屋』の窓より外を眺むる時、第一に目に入るは、曾て

己の造りたる烟突なり、彼一時は恐れぬ、己が前に勞働者なりしこと知られて爲めに評判よき學院に不信用を來すことなきかと。然れども、彼決してかゝる恐怖を抱く必要なかりしなり。即ち教師として大に適當なることを示し、生徒は公に彼が佛語の知識該博なる由を表明したりき。彼を知る人は皆——同僚も生徒も——尊敬と友情とを彼に向け、其一度彼が過去の苦闘困難の歴史を知るや、益々彼を尊敬せり。

サー・サミュエル・ロミリー、亦自修獨學の人として其不屈不撓なること前の石工に劣らず、佛蘭西亡命者の末なる寶石商の子たり。早年の時、教育を受ける極めて少かりしが、不屈の専心を用ひ努力を常に同一目的に集中して、凡ての困難障礙を打破したり。ロミリー其自叙傳に於て曰く、『余は十五六歳の交、拉丁語の研究に全力を盡くさんと決心せり、而も此時は拉丁語については僅に文法の極めて初歩の規則を知れるのみ、爾後三四年之が研究をなせしが、此間に、拉丁語時代の散文家の文は大抵讀み盡くしたり、唯ヴァロウ、コルメラ、セルサスの如き純粹なる學術を論述せしものを讀まざりしのみ。

自修者と
してのサ
ー・サミ
ユ・エル
・ロミリー

余はリヴァーサラスト、タシタスの全著述を三回反復讀了せり。又シセロの最も有名なる演説筆記は皆學び、ホーマーの大部を翻譯せり。テレンス、ヴァーギル、ホレース、オヴサッド及びジュヴェナールの著は幾度も讀みたり」と。

彼は亦地理學、博物學、物理學を學び、一般知識に通曉すること世の常にあらず。十六歳の時に、衡平裁判所の書記に徒弟となり、勤勞甚だ力む、遂に辯護人となるを得、其勤勉堅忍は成功を確かならしめぬ。千八百〇六年、フオックス政治の下に「大狀師」となるを得、確實に其道を進みて、其職に最高の名を得たり。然れども、彼は常に自己の無能を感じて苦惱痛哭し、之を醫せんがため勤勞して倦むことなかりき。彼の自叙傳は有益なる事實の教訓なり。情操の書として適當なり、注意して讀む價值充分あり。

サイ・オータースコットは、其若き友人ジョン・ライランの生涯を以て、堅忍の力の實證として、古今随一なりとなすを常とせり。ロソクスバルグ州シェアーの荒村に住む牧人の子なるライデンは、殆ど全く獨學自修に依れり。蘇格蘭牧人の子にして獨學の人多し、ホッグ譯者註、十九世紀蘇格蘭の詩人は、丘陵の側

ジョン・
ライデン
の堅忍

面に羊を牧しつゝ臥して、書物の文字を寫して、書くことを學びぬ。ケアーンズ譯者註、愛爾蘭の法律家、雄辯家は、初めラムマー沼地にて牧羊をなせしが、專心勤勉の効空しからず、遂に教授の椅子を占むる後、今猶ほ此地位にあり。マーレー、フアーグソン譯者註、共に前に出づも、亦此種類にして、彼等は皆早く知識に對する渴望に依りて勵まされたるなり。而して我ライデンも亦然るなり。赤貧跣足の少年たる時、ライデンは日々沼地を超え、七八哩を歩いてカークトンの一小村校に通學せり。彼は赤貧洗ふが如くなるにも屈せず、敢然として進んで大學に入らんとしてエディンバラに赴けり。

エディンバラに在りて、ライデンはアーチバルド・コンスタブルの有する一書店に往來すること常なりしが、後出版業者として其名を揚ぐるに至りたり。彼は手に一大紙匣を持ち、空中の楷子に止まりて時間を過し、其陋宿に彼を待てる僅かの麵包と水とを忘れ勝ちなりき。書籍に近つき講義に近つかんとすること、是れ彼が唯一の希願なり。かくして彼は、科學の門戸に辛勞し、健闘し、不屈不撓の剛毅は、遂に彼をして深き知識を得しめぬ。齡十九に滿

たずして、其希臘語、拉丁語の知識、其有する學識の分量は、エティンバラの教授總てを驚かせり。彼は眼を印度に注ぎ、施政上の一地位を得んと計りしも、失敗せり。然るに偶、外科醫の助手に空地あるを告ぐるものあり、然れども彼は外科醫にあらず、醫術を知らざることを小兒と異なるなし。さりながら、彼は學ぶことを得、次に彼は六ヶ月の終りには此職を占めざるべからずと通知せられぬ。驚くべきにあらずや。然れども何物か能く彼を挫き得ん、彼は直ちに普通三ヶ年要する所を六ヶ月にて學習せんと始めたり。六ヶ月の終りに、彼は醫師の免狀を得たり。又スコット其他二三の友人、彼を助けて、印度出發の準備をなさしめ、彼は遂に舟出しぬ。發するに臨み、其詩を出版す、題して『幼年の舞臺』と云ふ、いと美なり。印度にありて、彼は最大の東洋學者となるべく見えぬ。然れども惜い哉、熱天に暴露して、熱病の冒す所となり、夭逝するの不幸に會せり。

ケンブリッジ大學の希伯來語の教授なりし、故リ博士の生涯は、堅忍決志が、文學の成功に力をなすことを、近時に於て最も著しく例證す。彼はシユ

ルースベリーに近きログナーの慈善學校にて教育を受けたり。然れども教師は今日まで未だリーの如き魯鈍の子に會はずと言ひし程なれば、當時は唯是れ一個無名の鈍才たりしなり。彼は大工の徒弟となり、成年に達するまで、此職に働きたり。餘暇を讀書に用ひしが、中に拉丁文の引照ある書籍ありし故、彼は此拉丁文の意味を知らんと願ひたり。彼は一拉丁文法書を購ひ、拉丁語を學び始めぬ。アーデル公の園丁たりしストーン(譯者註、前に出づ)が遙か以前に言ひし如く、『人物事を學ばんと欲するとき、唯字母二十四字を學ばゞ足れるにあらずや』。リーは夙に起き遅く寝ぬ、而して其奉公期限終らぬ中に、拉丁語に熟通しぬ。一日某禮拜堂にて大工の業を勉め居るとき、一冊の希臘語聖書を認め、直ちに希臘語を學ばんと希求を起しぬ。

是に於て、彼は拉丁文の古物二三を賣りて、希臘語の文法と辭書とを購求したり。希臘語の學習甚だ面白くして、忽ち之に熟通しぬ。次に彼は其希臘語の書物を賣りて、希伯來語の書物を求め、此語を學びぬ。然れども一人の教師あるにあらず、名聲や報酬を得んとの野心あるにあらず、唯其天才の向ふ所

に従ひ、我趣味の赴く所を逐ふのみ。次に彼はカルデア、シリア、サマリアの語を學ばんと始めぬ。然れども、彼の研學は漸く健康を害するに及び、夜間長時間書物を讀みしたため、眼病に罹れり。依て一時之が研究を中止して健康を回復し、日々の業務に従事せり。其實業家(大工)としての品性卓越にして、其業は繁盛し、其收入は妻を娶るに充分となりし故に、二十八歳の時結婚せり。彼は今家族の生計に全力を盡くすことに決心し、贅澤を廢し、文學道樂を止め、其藏書を總て賣り拂ひたり。

然るに或時、彼が生活唯一の便なる大工道具の箱、火災の爲めに燃えて、飢餓身に迫りたり。若し此事なかりせば、彼は一生の間大工の業を續けしならん。彼は新に器械を求むる資なく、依て子供等に文字を教ふることを始めたり。是れ最も資本を要せざる業なり。然るに彼幾多の國語に通ずるにも拘はらず、普通學に通ぜざりければ、初めは子供に教ふること能はざりき。さりながら、彼に巖の如き決志あり、熱心事に従ひ、算術、作文を研究して、子供に是等の知識を與へ得る程になりたり。彼の虚飾なき、單純、佳美の性格は、次第に彼

に友人を造り、學問ある大工(人)彼をかく呼びぬの學識博きことは大評判となれり。

近隣の牧師に、博士スコットあり、リーの爲めに斡旋して、シュルースベリーの一慈善學校の校長とならしめ、世に稀なる東洋學者として之を紹介したり。友人スコット等は、彼の爲めに書物を求め、彼は亞拉比亞語、波斯語、印度語を相續いて學習したり。彼は郡の地方國民軍の兵卒となりしが、其間も研究を怠ることなく、語學に熟達すること益々大となれり。遂に親切なる恩人スコット博士は、彼をしてケムブリッジ大學の「クイーンズ學部」に入るを得しめ、彼は數學的知識の豊富なるを以て、其名を揚げしが、研學暫くを経て、亞拉比亞語と希伯來語の教授に空位を生じ、彼は直ちに選ばれて此名譽ある位置を占めたり。教授として遺憾なく職責を果せる外に、リーは東洋諸國に福音傳道の爲め出立せんとする傳道師等に東洋の諸國語を教へたり。彼は亦聖書を亞細亞の數個國の語に翻譯し、又ニュー・シラン島の國語を學習して、當時英國に居りし二人のニュー・シラン島會長のため、文法と單語集

晩年に學問せし人
ス、ベル
ン、グ
ン、ド
イ、コ
ス、ガ
カ、オ
チ、ノ
ド、其
他

とを作り與へたり。此書は今も尙ニユー・ジイランドの學校に於て日々用ひらる。上述の如きは、博士サミューエルリーの簡單なる經歷なり。我文藝科學の士の最も卓越せるものゝ生涯も、亦自修に於て堅忍の効力の大なるを示して教訓を與ふ。是と彼と誠に善く相應ずと謂ふべし。

諺に曰く『學問するに晩しと云ふことなし』と。此語の眞なるを證明する有名な人々は、尙他に多數あり。晩年になりても、苟も始めんと決心をなさば、大を成し得るなり。サー・ヘンリー・スเปルマン(譯者註十七世紀、英の歴史家は、五六十歳の頃に至るまで科學の研究をなさず。フランクリンは五十歳を超えて物理學の研究に入れり。ドライデン(譯者註十八世紀、英の文學者)スコット共に、四十歳に至るまで著述家として知られざりき。ボツカチオ(譯者註十四世紀、伊の小説家)が文學に入りたるは三十五歳の時なり。アルフィーリ(譯者註十八世紀、伊の詩人)が希臘語の研究を始めしは、四十六歳の時なりき。博士アーノルドは、高齡に及びて、獨逸語を學びたり。是れニーブル(譯者註十九世紀獨の歴史家)の書を原語にて讀まんためなり。又同様にジュームス・

愚鈍者に
名を
揚げて
人々を
驚かし
て、
將軍
の
名
を
知
れ
し
メ
ン
ナ
シ

ワットは、齡四十にして、グラスゴウに器械製造業を營める時、佛語、獨語、伊語を學びぬ。是れ是等の國語にて書かれたる有益なる器械學書を讀まんためなり。トーマス・スコット(譯者註十九世紀、米國の鐵道管理者)は、五十六歳を過ぎて希伯來語の研究を始めたり。又ロバート・ナール(譯者註十八九世紀、英の神學者)が、老年に及びて、一日床上に横たはり、病に苦みつゝも、伊太利語を學べるを見たるものあり。マールの目的は、マコウレイ(譯者註前に出づ)がミルトンとダンテとの價值を寫しと言ひたるを批判せんためなり。譯者註、ダンテを伊太利の原文にて讀まんためなり。ハンデルが、其大作を世に出したるは四十八歳後のことなり。まことや高齡に及びて、全く新しき道を開拓し、全く新しき學問を始めて成功したる人は世に甚だ多し。薄志の徒、懶惰の輩の外は、誰か『余は學習するには齡高きに過ぐ』と云はんや。

世界を動かし、これに指導の地歩を占むるものは、天才の士よりも、寧ろ堅實、確志、不撓、勤勉の人なり。是れ吾人の前に述べし所なれど、今復た茲に繰返す。天才者の早成の例も、亦世に多きこと否定すべからず。然りと雖も、幼時の

怜惻が後來の大發達を示さるること比々として然り。早成が智力の標徴とはならずして、疾病の標徴たること往々これあり。所謂著しく怜惻なる少年と呼ばれしもの、其後如何なる人になるか。かの級長や優等生や今何處にあるか。彼等の一生を調べ見よ、學校にて負けたる魯鈍の兒が、彼等學校の優者を超越すること屢々なり。怜惻の少年は褒賞を得然れども、彼等が人に優れたる敏速快捷に依りて獲得したる褒賞は、必ずしも彼等に益をなさず。寧ろ褒賞すべきは努力なり、奮闘なり、服従なり、益し吾人の最も推奨すべきは、たとひ天資は劣れるも最上の力を揮ふ青年ならざるべからず。

少年の時、鈍物と呼ばれしも、後世に光彩を放つ人となりて名を揚げしものゝ數甚だ多く、これのみを記するも、倣に一章を成し得べし。然れども、吾人は唯二三の例を示す餘白を有するのみ。畫家ピートロ・チコルトナは、少年の時、甚だ魯鈍にして「驢馬の頭」と綽號せられたり。又トーマン・ガイデは、一般に鈍重なるトムと呼ばれたり。されとも彼は勤勉に依りて、後最も卓越せり。ニュートンの學校にあるや、其席順「下より二番目」なり。ニュートンより上席の

一少年、ニュートンを蹴りたることあり。ニュートン憤然として闘を挑みて勇を示し、かの少年を負かしたり。ニュートンは固なる意力を以て勉強を始め、かの敵手の少年を、學事になても打ち負かさんと決心し、遂に級の首席に登りたり。

我國の大神學者にして、早成なうござりし人なり。アイザック・バロウ、チャーター・ハウス學院の生徒たりしや、士として其能く、と、守守的習習と、學事の怠慢とを以て有名なりき。されは雨親の心配一方ならず、父は常にかく言ひぬ、『若し恩愛の神、我子供の一人を取り給ふならば、そがアイザックならんことを望む。彼は我子々の中最も前途見込なし』と。アダム・クラークは、少年の時、其父之を『憫むべき鈍物』と云ふ觸らせり。彼の行ふこととし所は、唯大石を轉ずることのみ。デーン・スキフトは、タブリ・大學に於ては落第せしことあり、僅に『特別』を以てオックスフォード大學に推薦せられしのみ。有名なる博士シヤルマース、及び博士クック（道徳哲學の教授は、セノー・アンドリュースの寺領學校に於て共に生徒たりき。二人其魯鈍にして惡戯を好みしかば、教師はい

たく憤激して、匡正し難き愚人として二人を放逐したり。

かの顯赫たるシェリタン(譯者註、十八世紀、愛爾蘭の政治學者兼戯曲家)も、少年の時は頗る無能にして、母教師に託する時、附言して曰く『此子は匡正し難き鈍物なり』と、ナター・スコットナター・スコットも少年の時は鈍物にして課業に直せず、只口論を好みたりエデノン・バラ人學に遊べるや、教授ダービルはスコットに一宣言を下して曰く『スコットは鈍物なり、又死するまで鈍物ならん』と。チャタートンは何物にもなり得ざる愚物として、母の許に送り還されたり。バーンスは魯鈍の少年なりき、唯競技に長ぜしのみ。ゴールドスミスは己を以て遅く花開く植物とせり。アルフォーリーは大學を出づる時其知識入る時と異なるなし、後専門學を修めて大名を成したれども、其之を始めしは、歐洲の半ばをさまよひし後のことなり。ロバート・クラークは、青年の時、遊蕩者ならずとするも少くも愚物なりき、然れども其精力は常に惡事に於ても強盛なりき、彼の家族は彼を家より出さんことを欲して、船に上せて、マドラス(印度の南にあり)に送りたり、而して彼は印度に留まりて、遂に印度に英國の

力を据ゑたりナポレオンもウエリントンも魯鈍の兒にして、學校に於ては秀名を得ざりき。ナポレオンに就いてはアフランテイス夫人言ひぬ『彼は健康優れたりき、然れども、他の點に於ては群衆と異ならざりき』と

北米合衆國の元帥ユーリセス・グラントは、少年の時、母よりユースレス・グラント(譯者註、無用なるグラントの意)と呼ばれたり彼はかくまでに愚鈍なりしなり、リー將軍の副官として最偉の名ありしスー・イン・オール・デ・ヤックソンは、少年の時其迟钝なる點に於てのみ名ありき、其ウエスト・ポントの陸軍士官學校に入るや漸く不撓なる専心堅忍を以て名を得たり。一の仕事を課せらるゝときは、之を完成するまでは止めず、又其充分に知らざることを知れるが如く装ひしことあらず彼を知れる一人記しぬ『日々暗誦すべき課業ありて、教場にて教師より質問をかけられたる、淺見も淺見も彼は答へぬ、余は未だそれにかゝらず、昨日(又は一昨日)の分を暗誦しつゝありしなり』と、彼は遂に七十人の級にて十七番にて卒業せり、初めは其知識シャックンンより劣れる生徒は一人もなかりしならん然れど競走の決勝點に於ては、

彼は己に先んずる者僅に十六人を有せしのみ、五十三人を追ひ越せしなり。時人は下の如く言ふを常としき、若し在學年間四ヶ年にあらずして十ヶ年なりしならば、ジャックソンは首席を占めて卒業せしならん」と。

(右は千八百六十三年、六月十一日、タイムズ新聞の通信)

慈善家ジョン・ハフーも亦鈍物にして後、名を成せし入學校に七年間ありたれども、殆ど一事をも覺えざりき。ステイブソンは、青年の時、主として投石戯と相撲に熟練し居ること、又仕事に注意することを以て名ありき。かの顯赫たるハムフリー・デーヴィーは別に群童より伶俐なりしにあらず、彼の教師なるカーデュ博士は、後デーヴィーについて言ひしことあり、『彼が余と共にありし時には、後依て以て名を揚げし如き能力を認むる能はざりき』と。げにデーヴィー自身も後年、其學校にて大に怠慢をなすまゝに放任せられしを幸福とせり。プロットは、人其早成を語ると雖も、學生としては遅鈍なりき、然れども彼は堅志と忍耐、これ早成に勝るものとを有せり。其蒸氣機關を完成するを得しもの、かゝる性能と其注意して養成したる發明の才とに

由る。

愚鈍者の
成功は
忍に由る
話

博士アーノルドが少年について言ひしもの、又成年についても眞なり。曰く『少年の間の相違は、才幹の相違は少くして、精力の相違が主たるなり。堅忍と精力とは忽ち習慣になるものなり、茲に一愚人あり。此者固執と専心とを有すとせよ、彼が後、かゝる性能を有せざる賢者を率ゐんこと疑ふべからず。遅鈍にても確實なるは競争に勝つ。學校に於ける少年の席順が、社會に出て後の地位を定めざるは是れ堅忍の如何に由るなり。學校に於て秀拔なり、いものが社會に出てい凡庸者となること多く、前途に望なき遅鈍の少年が、其能力は遅慢なるも、其歩武確實なるため、社會の指導者となること多し。是れ奇なりと雖も事實なり。』

此書の著者譯者註、スマイルス氏自ら少年の時の同級生に世にも稀なる愚物ありき。教師は代る／＼此少年を教育して、其熟練をあらはさんとせしが、皆失敗せり。或は體罰を加へ、或は褒美を與へんと約し、或は甘言を以て勸め、或は熱心に懇願するも、皆同様に無効なりき。時には試みに彼を級の首席

に置きたれども、其降ることの速なる驚くの外なし。教師は醫し難き愚人として彼を見棄て、其一人は彼を「驚くべき痴漢」とせり。然れども、彼は遅鈍なりと雖も、心中に目的を確く抱きて棄てず、此目的の精力は、筋肉發達し齡長ずると共に、發達成長せり。而して奇なるかな、彼は後遂に實務に従ひて、其下に昔の學友を多く用ひ、遂に同級生の大部を超越すること遙かなるに及べり。著者は彼が其故郷の町長となりしを聞きしが、其後如何に身を擢んでしかを知らず。

正道を歩める龜は、惡道にある奔馬をも追ひ越す。青年、遅鈍なりとも、何を關せん、たい勤勉なれば可なり。一部の敏速は却って缺陷たることあり。速に覺える少年は速に忘る。こと多ければなり。又敏速なる少年は、専心堅忍の性能を涵養する必要を見ざればなり。然るに専心堅忍の性能たるや、品性の、建造に缺くべからざる要素にして、敏速ならざる少年は、必要上自ら之を教養す。デーヴヤー言ひぬ『余の今日ある、余自身にてなせし所なり』と。而してこれは一般に眞實なり。

最後に臨んで、吾人は上來記す所を結論せんと欲す。最良の修養は學校、學院に於て教師より得るものにあらず、成人となりて後、自己の勤勉なる自修に依りて得るものなり。故に人の両親たるもの子の才能の早く花咲かんとを待つを要せず、忍耐して靜に待つべし。善良なる實例と靜肅なる訓練との働くに任すべし。而して其餘は之を大能者の攝理に一任すべし。又両親は子が充分なる健康を有し、其體力を自由に働かし得ることに注意し、彼をして自修の道にあらしめ、彼が専心堅忍の習慣を養成するに留意すべし。然らば、子長するや、若し好資性を有するものならば、盛んに自修をなして効を奏するを得ん。